
恋の大漁祭！

紫陽花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の大漁祭！

【Nコード】

N2011B

【作者名】

紫陽花

【あらすじ】

恋愛は惚れた方が負けなんて、誰が言ったか知らないけど、一生分の勇気を振り絞り、気になる人に想いを伝える。届け言葉、伝えたい！！

卒業式

クラスメートのすすり泣く声が聞こえる。

みんなそれぞれの思い出が脳裏をよぎっているのだろう。

そしてそれは校歌を歌うところで最高潮に達した。

目から大粒の涙を流しながら泣く子、泣きながらも必死に歌っている子、すでに何を言っているのか分からない子、これもまた、みんなそれぞれである。

私たちの卒業式は近年では例を見ないほどの感動的なものだったらしい。

もちろん私も目頭が熱くなる場面が何度もあったが、この先のことを考えると、とても泣いてなどいられなかった。

卒業式が終わり在校生の間をみんなが思い思いの顔で通り抜けていくなか、きつと私の顔だけ緊張して強張っていたに違いない。

教室に戻り、担任の長い話が始まる前に昨晚、三時間かけて仕上げた『話があります。このあと裏庭まで来てください。』と書いてある手紙を隣の席の千秋君に誰にも見つからないようにそっと渡した。

多分この瞬間の事は私と千秋君しか知らないこと、何だか二人だけの秘密を作ってしまったような気がして嬉しかった。

もうこの後のことはほとんど覚えていない。

担任の長い話の内容も、自分がどうやって裏庭に来たか思い出そうとしても断片的な記憶しかない。

裏庭は日が当たらないせい少し寒くて薄暗かったが、人の姿は無く、告白には絶好の場所だった。

十五分は過ぎただろうか、千秋君はまだ来ない。

もしかしたら私が三年間、抱き続けたこの想いは伝えることがないまま終わりを告げてしまうのではないのだろうか、そんな考えが頭に浮かぶ。

これが私の運命なのかもしれない、仕方のないことだ、きっと最初から決まっていたことなのだ、そんな言い訳をしながら終わるのは嫌だった。

確かに千秋君と私では釣り合わないかもしれない。

千秋君は陸上部のエースで背丈も高く、屋外のスポーツをしているわりには色白で、顔もパツチリとした目と鼻筋が綺麗に通っているのが印象的かなりの美形で狙っている女子も多いと聞く。

今でも思う、どうしてこんなに競争率の高い、高嶺の花的存在の千秋君を好きになってしまったのかと……でも後悔はしていない、自分勝手だが悪いのは私ではなく、それだけ魅力的な千秋君がいけないのだ、そう思うことにしている。

少し弱気なことを言っているが、自信がないわけではない、私は千秋君との接点をもつために陸上部のマネージャーになり、そのなかで一生懸命アピールしてきたつもりだ。

そこら辺の女子よりは遙かにそして確実に成功確率が高いと思う。

私は両頬を赤くなるほどの強さで二回叩いて気合いを入れた。

「よし！」

そう言っただツポーズをとる。

「何してんのマネージャー？」

どつぷりと妄想の世界に浸っていたとはいえ、後ろから近づいてくる人の気配に全く気づいていなかった私は、突然のことに吃驚して「キヤッ」

と有られない声をあげてしまう。

後ろを振り向くと千秋君のちよつと冷たい軽蔑した目が私を見ていた。

「な、なによ…私がガッツポーズをとったらいけないの？ それに私にはマネージャーじゃなくて千春っていうちゃんとした名前があるんだから」

なんて可愛くない言い方…自分が嫌になる。

「別にそんなことはないけど、面白くなって思っただけです。マネージャーさん」

「意地悪」

「いめん、いめん」

本当にいけずな奴だ。でも、こういうところもすべて含めて好

きなだからたちが悪い。

「ごめんと言われただけで全てを許してしまう。」

恋愛というのは惚れた方が負けだと言うが、まったくその通りだ。

しかし、こんな馬鹿話をしていられるのも今だけかもしれない、ふと今日寝る時に嬉しさと哀しさ、どちらで枕を濡らす事になるのだろうか考えた。

「で、話って何？」

ここからが本番だ。

「えっと、あの〜なんていうか……」

なんと歯切れが悪いことが、ここまで来て告白しないとでも言うかのような。

「だから、その〜つまり……」

たった一言いうだけなのに、どうしても出てこない。

その一言を言ってしまうえばもう二度と千秋君と馬鹿話が出来なくなってしまうかもしれない、そう考えるだけで、とても怖くて哀しかった。

私があなただけに届けたい言葉はたくさんあるのに伝えたい想いは一つだけ……

「あなたのことが大好きです。」

そうそれだけなのに………??

今のは誰が言った？ 私？ いや違う。

そのくらい今の私にだって分かる。
周りを隅々までしっかりと見渡す。

薄暗くて少し寒い裏庭には私と千秋君の二人だけ、なぜか色白の
はずの千秋君の顔は茹で蛸みたいに真っ赤である。
少し可愛い千秋君、初めて見る顔だった。

でも千秋君の瞳は、私の瞳を見据えていて離さない。

あまりにも真剣に見つめてくるので、恥ずかしさに耐えきれずに
目をそらしてしまった。

少し惜しいことしたと後悔する。

「もう一度言う、あなたのことが大好きです。」

「えっ」

驚く私、千秋君が私を好き？ そんなまさか、自惚れにもほどが
ある。

「いや違うな……千春のことが大好きだ。俺と付き合ってくれ」

もしかして夢をみているのかもしれない。

でも、先ほど叩いた両頬はヒリヒリとまだ痛む……やっと夢じゃ
ないことに気づいた。

千秋君が私のことを好きなのだ。

頭で理解するよりも早く体が反応していた。
嬉しさのあまり目から雫が落ちる。
私はその場に泣き崩れた。

「えっ！なんで泣くんだよ！ ひどいこと言ったか俺？」

こんなに慌てる千秋君、はじめてみた。

「う、ううん 違うの…お願いもう一度言って」

「うそ！四回目かよ！！」

こんなに困る千秋君、はじめてみた。

「お願い、ねっ！」

「仕方ないな、よく聞いとけよ！」

こんなに渋る千秋君、はじめてみた。

「山下千秋は河上千春のことが大好きです。」

「河上千春も山下千秋のことが大好きです。」

周りから見ればただのバカップルだろう。
だけどそれでも構わない、千秋と一緒になら、なんにだってなれる。
そんな気がする。

今日は私の知らない千秋をたくさん見ることができた。

これからはずっと千秋を隣で見たい。
心からそう思う。

そういえば、どうやら枕は嬉しさを濡らすことになるらしい。

おわり

（後書き）

読んで下さった方々ありがとうございます。評価、感想など何でも良いので待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2011b/>

恋の大漁祭！

2010年12月1日07時26分発行